

池田大作の仏教的アメリカ観

宮 川 真 一

はじめに

日本の近現代史は、アメリカ合衆国（以下、アメリカ）を抜きにして語ることができない。近代以降の日本には4つの対外的なトラウマがあるとされる。1853年に来航したペリーの「砲艦外交」による開国と不平等条約の締結、1895年のロシア・フランス・ドイツによる三国干渉、1924年のアメリカにおける「排日移民法」の成立、1945年の原爆投下を含む敗戦と占領統治である。これら4つのうち、3つがアメリカとの関係であった（長谷川 2004：9-37）。日本人のアメリカ観について、長谷川雄一は次のように述べている。

ペリー外交に対する屈辱感の存在の一方で、ペリーや米国を「日本開国の恩人」あるいは日本近代化の「先導者」として、親近感を寄せる意見が存在したことも事実である。……こうした「愛（→親米）」と「憎（→反米）」の矛盾・相反したとでもいうべき対米観こそ、近代以降の日本人の深層に共通する複雑で屈折した米国への想いを表していると言える。したがってこのような「アンビバレンス（愛憎併存）」の特徴を有する日本人の対米意識・感情により、現在に至る日米関係においては「対立期」と「協調期」での対米観はきわめて両極端なものになる傾向にあった。（長谷川 2019：330）

このように、近代日本では児童雑誌においても親米と反米の両極端な論調が繰り返されてきた（澤田 1999：253-82）。それは、「拜米」と「排米」の両極を振り子のように揺れ動いていると言ってもよい（亀井 1986：177-205）。

創価学会インタナショナル（以下、SGI）会長を務める池田大作（1928年—）の人生も、アメリカに触れずして語ることができない。池田はこれまで54カ国・地域を歴訪し、渡航回数は70回に及ぶ（『未来ジャーナル』2021.2.1）。その中で、1960年のアメリカ訪問が初の海外渡航であった。それ以来27回の訪米を重ね、さまざまな足跡を刻んできた。ハーバード大学をはじめとするアメリカの大学・学術機関での講演は7回に及ぶ。キッシンジャーに始まるアメリカの識者との対談集は18点を数え

る。2001年には池田を創立者とするアメリカ創価大学が開学した。池田が手作りで育ててきたアメリカ創価学会は、ストラウス理事長を中心に全米各地で発展を続けている(『聖教新聞』2021.3.2)。こうした業績に対し、デンバー大学を皮切りにアメリカの大学・学術機関は17の名誉学術称号を池田に授与してきた(年譜・池田大作Ⅲ編纂委員会 1995;「栄光の共戦譜」編纂委員会 2020;創価学会 2021a)。2020年には初の海外歴訪60周年を記念して、アメリカ各都市から池田にさまざまな顕彰が贈られた(『聖教新聞』2020.10.8)。また、学会創立90周年を祝賀してアメリカ各地が池田を顕彰している(『聖教新聞』2020.12.15)。

しかしながら、池田大作のアメリカ観は未開拓のテーマであり続けている。総合雑誌『潮』は、池田のアメリカ訪問とアメリカ創価学会を特集した(『潮』2007.7:122-43)。宗教社会学の分野では、『アメリカの創価学会——適応と転換をめぐる社会学的考察』、『アメリカ創価学会〈SGI-USA〉の55年』、『アメリカ創価学会における異体同心——二段階の現地化』といった著作が生み出されてきた。これらの業績では池田のアメリカ観に論及することはあるものの、その全体像が解明されたわけではない(Hammond and Machacek 1999=2000;秋庭 2017;川端・稲葉 2018)。本稿の目的は、池田のアメリカ観を全体として明らかにすることである。その際、池田の著作である小説『新・人間革命』を分析対象とする(池田大作 1998-2018)¹⁾。以下ではまず、『新・人間革命』とその分析方法を説明し、同書におけるアメリカの描写について量的に考察する。次いで、池田のアメリカ観を5つの側面に区分し、それぞれを質的に考察していく。最後に、全体を要約して本稿の結論を明示したい。

1. 『新・人間革命』と分析方法

小説『新・人間革命』は池田大作の最も重要な著書の一つである。池田はこの小説を1993年から2018年にかけて『聖教新聞』に連載した。新聞連載回数としては日本最多の6469回に上る。著者が65歳から90歳までの25年間続いた連載は、単行本の全30巻として結実した(創価学会 2021b)。著者によれば、「私の足跡を記せる人はいても、私の心までは描けない。私でなければわからない真実の学会の歴史がある」(①:2)²⁾。同書は次の主題を掲げている。「一人の人間における偉大な人間革命は、やがて一国の宿命の転換をも成し遂げ、さらに全人類の宿命の転換をも可能にする」(⑩下:445)。そして、こう始まる。「平和ほど、尊きものはない。平和ほど、幸福なものはない。平和こそ、人類の進むべき、根本の第一歩であらねばならない」(①:11)³⁾。ここには、創価学会による人間革命運動の目的は、全人類の幸福と平和の実現にあることが示されている。同書は池田が第三代会長に就任した1960年から、学会が目標としてきた2001年にいたる学会の歴史を中心に描いてい

る。著者は同書によって、『創価の精神の正史』と『真実の信仰の道』を後世にとどめ」ようとしている(③下:440-5)。池田博正によれば、『新・人間革命』は、後世の学会員の依拠となる“文証”とも言える(池田博正 2018)。佐藤優は、「池田の『人間革命』と『新・人間革命』の解釈を抜きにして創価学会の内在的論理をとらえることはできない」としている(佐藤 2020:146)。

『新・人間革命』は、世界中の創価学会員に大きな影響を与えていると考えられる。同書の文庫版は2020年に完結した(池田大作 2003-2020)。同書研さんのさまざまな副読本も刊行中である(聖教新聞社報道局 2019-2020; パンプキン編集部 2014-2020)。日本の学会では、2021年の活動方針として宗教分野に3つの柱がある。その3つ目に、同書の研さんが挙げられている(『聖教新聞』2020.11.2)。また、学会青年部は「新・人間革命」世代との自覚を深め、「新・人間革命」世代プロジェクトを始動した(『創価新報』2020.12.16)。さらに、同書は現在13言語に翻訳され、23カ国・地域で出版されている。(『聖教新聞』2020.12.9)。同書の研さん運動は、192カ国・地域に広がるSGIでも大きなうねりとなっているのである(『聖教新聞』2019.9.6)。ヘンリー・インダンガシによれば、『新・人間革命』は「世界の十大小説」の一つである。20世紀から21世紀にかけて、失われる恐れのある人間主義の真髓を、文学に回復することに成功した(インダンガシ 2018)。N. ラダクリシュナンは、「この小説に比肩できるのは、トルストイの『戦争と平和』くらいではないか」と語っている(ラダクリシュナン 2018)。

本稿ではこの『新・人間革命』全30巻の内容分析を試みている。同書は池田大作にとってライフワークの一つである。この小説は著者が90代を迎えた年に完結した。同書には著者のアメリカ観が集大成されていると考えられる。ここでは創価学会の機関紙『聖教新聞』の公式サイトである「SEIKYO online」の「人間革命検索サービス」を利用している(聖教新聞社 2021)。同サービスで『新・人間革命』全30巻を対象とし、キーワードを「アメリカ」で検索した。その際、「アメリカ大陸」など、国名としてのアメリカを表示しないページは含めていない。さらに、アメリカをトピックの主演としないページは含めていない。その結果、468のページが該当した。以下でアメリカが描かれたページを量的および質的に分析している。量的分析では同書におけるアメリカ描写の各巻ページ数、分野、方向を示す。質的分析では著者のアメリカ観における側面として、アメリカ創価学会、東西冷戦、政治対話、人種差別、文化交流の5つを立てる。そして、これらの側面に沿って著者のアメリカ観が明示されている描写を抽出している。こうした作業により、著者のアメリカ観の全体像に迫ろうとしている。

2. 「アメリカ」の量的分析

第1に、『新・人間革命』はアメリカで始まりアメリカで終わっている。また、大半の巻でアメリカを描いている。図1は各巻でアメリカが描かれたページ数を示している。以下の巻ではアメリカを大きく取り上げている。第1巻「旭日」「新世界」「錦秋」「慈光」「開拓者」の章は1960年10月のアメリカ訪問、第2巻「勇舞」は1960年11月のケネディ大統領当選、第7巻「文化の華」は1962年10月のキューバ危機、「萌芽」は1963年1月のアメリカ訪問、第8巻「激流」は1963年11月のケネディ大統領暗殺事件、第10巻「幸風」は1965年8月のアメリカ訪問、第11巻「常勝」は1965年2月～75年4月のベトナム戦争、第12巻「新緑」は1967年5月のアメリカ訪問を取り上げている。第14巻「使命」は1969年7月の“日米鼓笛隊パレー

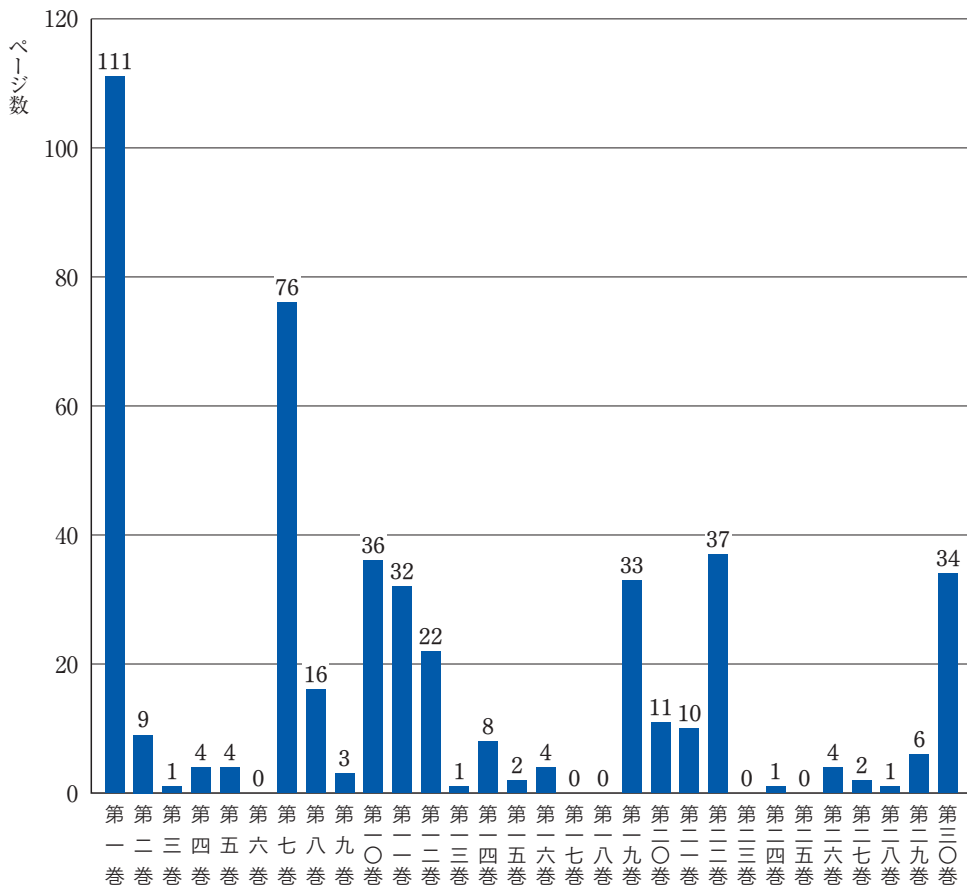


図1 『新・人間革命』各巻における「アメリカ」のページ数

ド”、第19巻「陽光」は1974年3月～4月のアメリカ訪問、第20巻「信義の絆」は1975年1月のアメリカ訪問、第21巻「SGI」は1975年1月の第1回「世界平和会議」、第22巻「潮流」は1975年7月のハワイ訪問、第30巻「雄飛」は1980年9月～10月のアメリカ訪問と1981年1月～3月のアメリカ訪問、「暁鐘」は1981年6月～7月のアメリカ訪問、「誓願」は1993年1月～2月のアメリカ訪問と1996年5月～6月のアメリカ訪問を取り上げている。

第2に、『新・人間革命』はアメリカについて、創価学会を中心に描いている。図2では、同書でアメリカを描いたページ数とその割合が分野別に示されている。分量が多い順に「創価学会」「創価学会員」「文化交流」「国際関係」「政治」「歴史」「社会」となる。第3に、『新・人間革命』はアメリカを肯定的に描いている。全体では肯定的66%、中立的13%、否定的21%となる⁴⁾。分野別にみると、「文化交流」「創価学会」「政治」「創価学会員」の各分野では肯定的な論調が中心となっている。「国際関係」「社会」の分野は否定的な論調に傾き、「歴史」分野では肯定的な論調と否定的な論調が拮抗している。

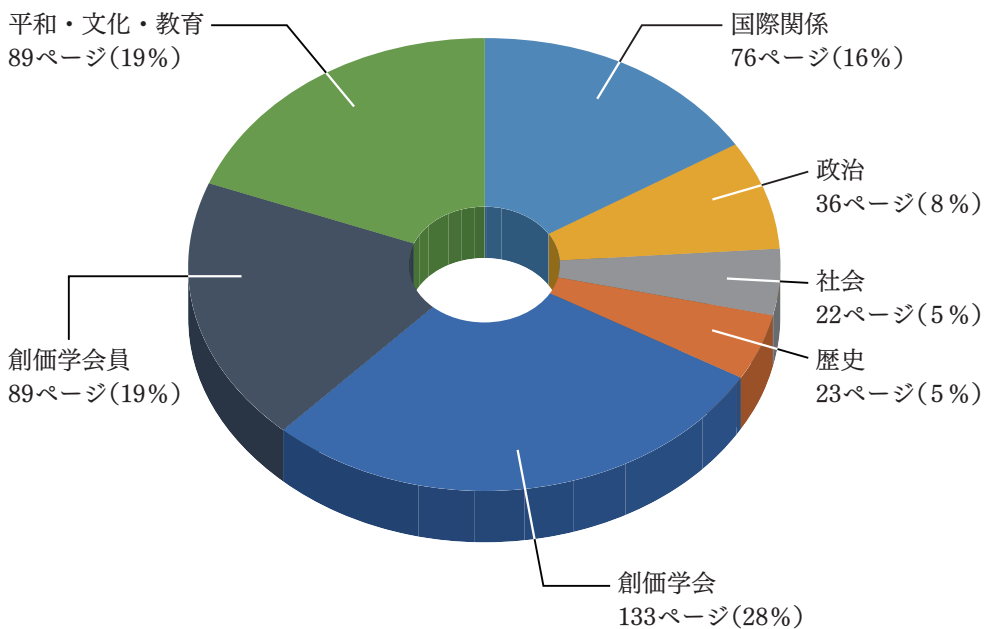


図2 『新・人間革命』における「アメリカ」の分野

3. アメリカ広布の序曲

アメリカ創価学会は山本伸一⁵⁾の指導のもと大きく発展していく。1960年5月、伸一は創価学会第三代会長に就任した。同年10月には初の海外訪問として、ハワイのホノルルに向かう。彼は恩師である創価学会第二代会長戸田城聖の写真を身に付けていた。生前、戸田は言った。「待っていた、みんな待っていたよ。日蓮大聖人の仏法を求めてな。行きたいな、世界へ。広宣流布の旅に……。伸一、世界が相手だ。君の本当の舞台は世界だよ。世界は広いぞ」。第二次世界大戦の終結から15年、人類は東西冷戦の泥沼にはまり込んでいた。アメリカ、ソ連をはじめ、大国の核兵器開発競争は激化していた。「……伸一、生きろ。うんと生きるんだぞ。そして、世界に征くんだ」。戸田の言葉は、「世界を鋭く見すえた仏法指導者の、切実な“救世の叫び”であったにちがいない」(①: 11-5)。

訪問団一行の通訳と案内を任されていたのは、3年前にアメリカに留学した男子部の正木永安である。彼は留学先のロサンゼルスに到着してまもなく、父を亡くしている。「正木君、悲しいだろう。辛いだろう。しかし、使命に生きる君らしく、いかなる悲しみや苦難をも乗り越えて、雄々しき指導者に成長されんことを祈ります」。山本伸一から励ましの便りを受け、正木は立ち上がった。その1年後には、戸田城聖が逝去した。「真の使命を忘れてはならぬ。世界の指導者に育つことを忘れてはならぬ」。伸一からの度重なる激励を胸に、正木は苦難を乗り越えていった。ホノルルで現地の創価学会員と懇談した一行は、風俗や習慣の違いに戸惑う。伸一は仏法の随方毘尼(ずいほうびに)という考え方について語った。「御本尊への信仰という、大聖人の仏法の本義に違わない限り、化儀などは各地の風俗や習慣、時代の風習に従ってもいいんだよ」。彼が最も恐れていたのは、「日本でやってきたことを絶対視して、世界でもすべて同じようにしなければならないという考え方に、幹部が陥ること」だった。この日の座談会で、会員の少ないハワイに地区が結成された。「今後、世界広布は急速に伸展するはずだ。それを考えれば、アメリカの玄関口ともいべきハワイには、班ではなく、地区を結成しておく必要がある」。地区部長には、英語のできるヒロト・ヒラタが抜擢された。「これからは日系人以外の人もどんどん信心するだろうから、英語ができることは大事な要件になる」(①: 21-66)。

一行はハワイからサンフランシスコに移動している。座談会では、アメリカ人のジョージ・オリバーがネバダの地区部長に任命された。「やがては世界各国に、日系人ではないリーダーが誕生していかなければ、本格的な広布の展開はありえない」からである。オリバーは「学会が世界宗教であることを証明する、第1号の地区部長」となった。座談会で、山本伸一は3つの指針を提案した。第1に「市民権

を取り、良きアメリカ市民に」なること。第2に「自動車の運転免許を取る」こと。第3に「英語をマスター」することである。これらの指針を、伸一はアメリカ各地の座談会で訴えていった。「やがて、それは、アメリカの同志の誓いの『三指針』となっていったのである」(①：105-29)。「アメリカの広宣流布の中心となる大切な地域」であるロサンゼルスでは、支部が結成された。伸一は語った。「これから本部として、アメリカをどう育てていくかが極めて重要になる。海外に対しては、日本のどこかの総支部につけるという考え方ではなく、本部が直接、面倒をみて、力を注いでいくようにしなければならない」。そして、南北アメリカ大陸にアメリカ総支部が結成された(①：322-39)。

1963年1月、山本伸一は2度目の訪米に出発している。ホノルルで教学試験を担当した幹部は、教学面でも日本とアメリカの違いに戸惑う。「広宣流布は、決して画一的方法では進めることはできない。国情や文化、民族性などを深く理解し、その国、その地域に価値をもたらす方法を見極めていくことが大切になる」。ロサンゼルスでアメリカ総支部西部総会に出席した伸一は、「アメリカを救うには、仏法の平和と人権の思想を、生命の尊厳と慈悲の哲理を、民衆一人ひとりに伝え、弘めていく以外に道はない」と指導した。ニューヨークで伸一は、アメリカにおける創価学会の法人設立について打ち合わせをした。学会が「各国で社会に根差した活動を展開していくには、それぞれの国で法人格を取得していく必要がある」。そして同年5月、海外初の法人格として正式に認められるに至った。「世界広布の先駆として、アメリカの未来への盤石な布陣が、整えられていったのである」。ニューヨーク支部結成大会となるアメリカ総支部東部総会で伸一は語った。アメリカ、とりわけニューヨークに仏法を流布していく意義は極めて大きい。アメリカは国際政治における西側陣営のリーダーである。アメリカの対応のいかんによって、いつ核戦争に発展するかわからないという現実がある。「そのアメリカに仏法を流布することは、核を廃絶する根本の哲学が広まることであり、世界平和の大潮流をつくることに」なる。当時、アメリカ広布のために誰かを職員とし、陰で組織を支える人をつくる必要があった。そして、正木永安がアメリカの本部職員となることを承諾したのである。これはアメリカ広布の一步前進であった。伸一は、これでアメリカの布陣が整ったと思った(⑦：105-214；⑧：40)。

1964年5月、山本伸一は正木永安にアメリカの機関紙発行について相談している。「私たちは、世界の平和を築き、人類の幸福を守ることが目的だから」、紙名を「ワールド・トリビューン」(「世界の護民官」の意)とすることも提案した。「これからは、ますますアメリカが大事になる」。「これから必要なのは、単に日本の情報を伝えるだけではなく、現地のメンバーによって編集され、体験なども、現地の人を取り上げた新聞」である。そして、この年の8月には英字新聞『ワールド・トリビューン』が創刊されたのである。これが海外で初めての機関紙であった。英語の機

関紙が発行されることによって、アメリカ社会に学会理解の輪が大きく広がっていった（⑨：95-8；⑩：74-5）。

1967年5月、山本伸一は7度目の訪米に際し、ロサンゼルス郊外に完成した妙法寺の入仏式に出席している。7年前に初めて渡米したときには300世帯ほどであったメンバーが、このとき約3万世帯にまで発展していた。そこで、アメリカを総合本部とし、西部本部、東部本部、ハワイ本部の3本部でスタートすることが発表された。「アメリカの同志には、山本会長が、世界の平和旅の第一歩を印したアメリカこそ、世界広布の先駆であるとの強い誇りがあった」。「メンバーは、いよいよ本格的なアメリカ広布の 때가、到来したことを感じた」（⑫：24-6）。

1974年3月から4月にかけて、山本伸一はアメリカを訪問している。この第10回となる訪米では、「サンディエゴ・コンベンション（大会）」が盛大に開催された。コンベンションが大成に終わったあと、伸一はアメリカの中心者に警鐘を鳴らした。アメリカは順調に発展してきたが、さらなる発展のためには中核の人材を大切に育てること、中心者と本部の職員が団結することが求められる。「ところが、中心者が名聞名利に走り、権力欲をもつようになると、皆を生かすのではなく、自分のために利用しようとするようになる。そして、自分になびかない人や異なる意見を言う人は排斥してしまう」。また、保身に陥った中心者は自分が泥をかぶらないために「皆を縛り付け、自主性、主体性、頑張ろうという意欲を削いでしまう」。「アメリカは民主主義の象徴の国」であり、「その国で独裁のような体質の組織をつくってしまえば、必ず広宣流布は破綻」することになる（⑬：245-72）。

1981年6月、山本伸一はニューヨークを訪れている。これが16度目の訪米となる。伸一は大詩人ホイットマンの生家を見学した。その時、ホイットマンの「開拓者よ！ おお開拓者よ！」の詩が思い浮かんだ。日米親善交歓会では、伸一の詩「我が愛するアメリカの地涌の若人に贈る」が発表された。「今／病みゆく世界の中にあつて／アメリカ大陸もまた／同じく揺れ動きつつ／病みゆかんとするか」。かつてのアメリカは全世界があこがれ、自由と民主の象徴であった。妙法を唱える青年たちには、祖国アメリカを蘇生させゆく使命があることを詠っていく。「私は広布への行動の一切を／諸君に託したのだ／一切の後継を信ずるがゆえに／今／世界のすみずみを歩みゆくのだ／君達が／小さき道より／大なる道を創りゆくことを／私は信ずる／ゆえに／私は楽しく幸せだ」。伸一は「青年たちに後継のバトンを託した」のである（⑭下：7-25）。

4. ニューヨークの黄昏

東西冷戦とアメリカ同時多発テロ事件に揺れ動くアメリカに、山本伸一は平和への道を示し続けていく。1962年10月、アメリカのケネディ大統領は、キューバにソ

連の攻撃用ミサイルの発射基地が建設されているとの特別放送を行っている。米ソ間の緊張は一気に高まり、「冷戦」が「熱戦」に転じて人類を全面核戦争の瀬戸際に追い込むキューバ危機が発生した。この危機の背景には、第二次世界大戦後におけるアメリカとソ連の核軍拡競争があった。1945年にアメリカが原爆を開発すると、49年にソ連も原爆を保有した。1952年にアメリカが水爆実験に成功すると、53年にソ連も水爆を完成させた。1957年にはソ連が大陸間弾道ミサイルを開発した。ソ連の軍事的な優位に、アメリカは衝撃を受けた。アメリカはソ連領空へ査察飛行を行い、1960年にはU2型機撃墜事件が起きている。キューバ危機のもう一つの背景には、キューバとアメリカの二国間関係がある。歴史的にアメリカの半植民地状態に置かれてきたキューバでは、1959年にキューバ革命が起きた。社会主義化が進むキューバとアメリカは、1961年に国交を断絶した。キューバはソ連に接近していった(⑦: 50-61)。

キューバ危機のさなか、ホワイトハウスでは激論が交わされている。アメリカの対応策は、海上封鎖のプランと武力攻撃のプランに集約されていく。ケネディ大統領は海上封鎖を選んだ。第二次世界大戦ではケネディは乗っていた魚雷艇を攻撃され、体を痛めつつも部下を助けて危機を脱している。彼の冷静さは「人類の危機」においても発揮された。「いかに文明が進歩しようとも、いかに時代が変わろうとも、最後に、問われるのは『人間』自身である。人間の決断が、自らの運命を、そして、世界の運命を決定づけていく」。ケネディはソ連のフルシチョフ首相に、「キューバ不侵攻」の意思を伝えた。フルシチョフはケネディに、キューバから「攻撃用兵器」を撤去することを伝えた。米ソ間の息詰まる攻防の末、「危機の十三日間」は収束した(⑦: 62-75)。

山本伸一は、総本山での指導会でキューバ危機について語っている。「この重大問題に対する、われわれの在り方の根本は、“絶対に戦争を起こさない、起こさせない”という、強盛な祈りです」。世界は東西両陣営に分かれているが、学会は地球民族主義である。「全世界の民衆を、平和の方向へ導こうとする立場」である。今回の問題は「大仏法が時代の絶対の要請であることを実感させた」出来事とも言える。伸一は世界の指導者との対話が極めて大事であることを痛感した。対話によって世界の指導者の心と心が結ばれるなら、そこから平和の大道が開かれる。「民衆の相互理解のための文化の交流」も急がなければならないと彼は思った(⑦: 77-81)。

1965年2月、米軍の北ベトナムへの本格的な爆撃により、ベトナム戦争が始まっている。米軍が南ベトナム政府軍を支援するという段階を超え、アメリカが戦いの主役になっていく。アメリカの北爆に対する、北ベトナムと南ベトナム解放民族戦線のゲリラ戦という構図である。北ベトナム側もソ連と中国の支援を受け、ベトナムは東西両陣営の熱戦場となった。山本伸一は1966年11月の青年部総会で、ベトナム

ム戦争解決への提言を行っている。1967年8月の第10回学生部総会でも、ベトナム戦争について提案を行った。アメリカ社会も次第に暗澹とした空気に包まれていった。特に、若者が精神的に荒廃していった。その中で学会の青年部員は、必死に仏法を研さんしていった。やがて「彼らは、戦争は仏法で説く、『魔』の働きによるものであることを、強く実感するようになった」。「人間の心のなかに宿る、憎悪や破壊や支配といった『魔性』の生命を打ち砕き、『仏』の生命を打ち立てていかなければ、本当の平和はないのではないだろうか」と彼らは語り合った（⑪：272-302）。

1968年1月に南ベトナム解放民族戦線が「テト攻勢」を展開し、北ベトナム側は勢いにのる。威信を碎かれて焦ったアメリカ軍は、同年3月に「ソンミ虐殺事件」を引き起こした。女性、老人、子どもを含む無抵抗な村民が犠牲となった。アメリカ軍による枯れ葉剤の散布も激しさを増した。数多くの障害児が生まれ、生態系にも異常が生じていった。山本伸一は、アメリカのニクソン大統領に停戦を訴える書簡を送っている。そこでは、アメリカが「爆撃の停止を世界に宣言し、平和のために会談する用意があることを明らかにする」よう求めた。また、「民族自決の原則に基づき、アメリカはベトナムから手を引くべきである」と訴えた。さらに、ベトナム復興のためにアメリカがリーダーシップをとり、「ベトナム復興国際委員会」「教育国際委員会」「医療と保健衛生国際協力委員会」「アジアの平和のための国際委員会」などの設置を提案した。この書簡がニクソンに届けられて間もなく、停戦が実現した。1975年4月にベトナム戦争は終結したが、この戦争による米軍の死者は約6万人、ベトナムの死者は約174万人に上ったとされる。1976年7月、ベトナム社会主義共和国が誕生した（⑪：305-19）。

1979年に第三代会長を辞任した山本伸一は、世界中を駆け巡っている。その中で、世界は東西冷戦の終結という転機を迎える。東西冷戦の端緒は、1945年のヤルタ会談であった。米英ソの三巨頭によって戦後の国際秩序の枠組みがつくられ、世界は西側陣営と東側陣営に分かれていった。そして、米ソの核軍拡競争が続いていった。伸一は東西対立を乗り越えるべく、各国首脳らと対話を重ねてきた。「スイスなど、よき地を選んで米ソ首脳らが会談を」など、具体的な提案も行ってきた。1989年には地中海のマルタで、アメリカのブッシュ大統領とソ連のゴルバチョフ共産党書記長による米ソ首脳会談が開催された。米ソの首脳は初めて共同記者会見に臨み、東西冷戦の終結を宣言したのである。ゴルバチョフはノーベル平和賞を受賞するものの、1991年末にソ連は崩壊する。そして、世界の至るところで民族、宗教、経済などをめぐる対立が深まり、局地的な戦乱も広がっていく（③⑩下：272-83）。

2001年9月11日、アメリカ同時多発テロ事件が発生している。アメリカでハイジャックされた旅客機2機がニューヨークの世界貿易センタービルに突っ込み、1機

は国防総省に突っ込み、別の1機が攻撃目標に向かう途上で墜落した。死亡者約3千人、負傷者も6千人を超える事態となった。アメリカ政府はイスラム過激派の犯行と断定し、「テロとの戦い」を宣言する。この事件の首謀者らが潜伏していると思われるアフガニスタンへの空爆を開始した。イスラム過激派による自爆テロも繰り返された。「どのような大義を掲げようと人びとの命を奪うテロは、絶対に許されるものではない」。山本伸一は「今こそ、『平和』と『対話』への大世論を起こすべきである」とさまざまな機会に強調した。2002年1月に発表した「SGIの日」記念提言でも、『『文明間対話』が21世紀の人類の要石となる』と述べている。また、「人類の平和を創造しゆく道は、長期的、抜本的な対策としては正しい価値観、正しい生命観を教える教育以外にない。めざすべきは『生命尊厳の世紀』であり、『人間教育の世紀』である」(30下:432-4)⁶⁾。

5. ワシントン DC の桜

山本伸一はアメリカを代表する政治家たちと対話を積み重ねていく。1960年10月、アメリカ訪問中の伸一一行は、アメリカを代表する大都市シカゴを視察している。一行は選挙のポスターを目にした。翌月には大統領の本選挙をはじめとする選挙が予定されていた。大統領選挙では、共和党のニクソン副大統領と民主党のケネディ上院議員との一騎打ちとなっていた。伸一は思った。「アメリカの民衆も、新しき指導者を、新しき理念を渴仰している。同じく、新しき時代を開く、仏法という生命の大哲学を待ち望んでいるにちがいない」(①:190-1)。この月に、伸一一行は首都ワシントンDCも視察している。国会議事堂やホワイトハウスを見て回り、ポトマック公園の周辺を歩いた。ここには、第27代大統領夫人ヘレン・タフトの希望で植えられた桜並木がある。1912年、当時の東京市長だった尾崎行雄が、日米友好の証として約3000本の苗木を送ったのである。この桜並木は、多くのアメリカ人から愛されるようになっていった。伸一は言った。「私が廢墟に咲く桜を見て詩を作っていたころ、ここでも日本から送られた桜を見て、心を和ませていた人がいたんだろうね。国と国とは戦争をしていますが、花を見て美しいと感じる人間の心が変わりはない」(①:257-63)。

1960年11月、ケネディがアメリカの大統領に決定している。ケネディはアメリカの開拓精神をたたえていた。43歳という若さに、初のカトリック教徒であり、数少ないアイルランド系の出身であった。「変革の時代」のリーダーとして大統領に就任したケネディの政策が、「ニューフロンティア」である。彼は人種差別の壁にも挑戦した。公民権運動の指導者キング博士が逮捕されると、ケネディはキング夫人を励まし、釈放に尽力したのである。当時、アメリカ国内も世界も激動の時代を迎えていた。ケネディが抱えることになる世界の苦悩を、山本伸一は共有していた。

ケネディはアメリカ大統領として、世界の安全と平和を守る責務を帯びることになった。伸一は創価学会会長として、「全世界、全人類の不幸を、精神的次元、つまり、いっさいの根源となる人間の生命という次元から解決しゆく」責務を帯びていた。ケネディが43歳であるのに対し、伸一は32歳であった。「しかも伸一には、財力も、後見人も、優れた知識人のブレーンもない。自ら無名の民衆のなかに分け入り、新しき知性を育むことから始めなければならなかった」(②：210-7)。

1962年12月、山本伸一はケネディ大統領から会見を申し込まれている。伸一は、その会見が政治的に利用されることを懸念した。「創価学会がめざしているのは、政治・経済体制を超えた、『人間主義』であり、『地球民族主義』である」。しかしながら、東西冷戦を終わらせるためにも、また、アメリカ広布のためにも、ケネディとの対話は必要であった。伸一は会見を承諾した(⑦：98-100)。ケネディとの会見は、1963年2月に予定されていた。伸一はケネディに戸田城聖の「原水爆禁止宣言」を伝え、米ソ首脳会談の早期再開を提案するつもりであった。ところが、日本の政界から嫉妬による横槍が入り、この会見は見送られることとなった(⑦：319-33)。さらに、この年の11月、ケネディは暗殺されてしまう。テキサス州のダラスをパレード中、何者かに狙撃されたのである。伸一は「ケネディの冥福を祈って、心のなかで題目を唱えた」。「ケネディ大統領に会う機会は、永遠になくなってしまった」ことが残念でしかたなかった。「語るべき相手を、ともに世界を担うべき人を亡くした無念さが、今、ひたひたと伸一を包んでいた」(⑧：289-302)。

1975年1月、山本伸一はワシントンDCの国務省で、キッシンジャー国務長官と会談している。伸一はキッシンジャーの奮闘に目を見張ってきた。彼は15歳の時に、ヒトラー政権下のドイツからアメリカに逃れてきた。少年時代から、働きながら夜学に通った。日々辛酸をなめつつも、強い人間に自らを鍛え上げていった。やがて国際政治学の教授となり、ニクソン大統領の補佐官として政界入りした。1973年にはノーベル平和賞を受賞し、この年から国務長官を務めてきた。長官は合理的で、飾らない人柄であり、急所を外さず、鋭い分析力をもっていた。彼は伸一に、世界のどこの勢力を支持しようとしているか尋ねた。伸一は答えた。「私たちは平和勢力です。人類に味方します」。それが人間主義であり、伸一の立場であり、創価学会の根本的なあり方であった。キッシンジャーは微笑んだ。伸一は中東問題についての平和提言を手渡した。長官はその場で提言を3回読み、大統領に伝えることを約束した。この日から伸一とキッシンジャーの友好は深まり、1978年には二人の対談集が出版されている(⑩：375-88)。

1978年1月、山本伸一はアメリカのエドワード・M・ケネディ上院議員と東京で会談している。彼はケネディ大統領の弟である。議員は核兵器の問題を取り上げ、「大統領になった兄のジョンが、就任の時に訴えたのが、核実験を禁止する条約の推進」だったと語った。また、南北問題について、「富める国は、貧しい国に対し

て、道義的責任をもつべき」であるとした。議員は米中国交正常化にも心を砕いていた。「人びとが互いに理解し合い、尊敬し合っていくためには、自らが人間的行動を起こし、精神と精神の触れ合いをつくっていかなければならない」。この伸一の思想に議員は賛同した。日米友好の橋が、また一つ架けられたのである (26: 128-36)。この年の10月、伸一はハーバード大学名誉教授のガルブレイス博士と東京で会談している。彼はカナダで大学を卒業し、ハーバード大学教授、駐インド大使、アメリカ経済学会会長などを務めた。さらに、ケネディら歴代のアメリカ大統領を支えてきた。1993年に伸一は、「二十一世紀文明と大乘仏教」と題してハーバード大学で2度目の講演をした。その際、博士は講評者を務めている。講演の翌日、伸一は博士の自宅を訪問した。2005年には二人の対談集が発刊されている (29: 8-24)。

6. キング博士の夢

山本伸一はアメリカにおける人種差別を解決するという夢の実現に力を尽くしていく。1960年10月、伸一一行はシカゴを訪れている。ミシガン湖のほとりにあるリンカーン・パークを散策している時、遊びの輪に入れてもらえない黒人少年を目にした。「少年の未来を思うと、伸一の胸は苦しかった」。当時のアメリカでは、公民権運動が大きく盛り上がっていた。1955年、アラバマ州のモントゴメリー市で、白人にバスの座席を譲らなかった黒人女性ローザ・パークスが逮捕された。この逮捕に黒人の怒りが爆発し、キング博士を指導者とするバス・ボイコット運動が始まっている。この運動は黒人側の勝利となり、公民権運動は全米各地に広がっていった。1957年には最初の公民権法が議会で成立している。伸一は思った。人種差別の「根本的な要因は、人間の心に根ざした偏見や蔑視にこそある」。この人間の心を変えてゆくには、「日蓮大聖人の仏法の人間観を、一人ひとりの胸中に打ち立てることだ。そして、他者の支配を正当化するエゴイズムを、人類共存のヒューマニズムへと転じゆく生命の変革、すなわち、人間革命による以外に解決はない」。伸一は心の中であの少年に呼びかけた。「君が本当に愛し、誇りに思える社会を、きっとつくるからね」 (1: 172-9)。

山本伸一はシカゴを訪問した折に、座談会を担当している。会場の前列には、黒人と白人のメンバーが仲良く座っていた。この座談会は、人間共和の縮図のようであった。「伸一にはそれが、かけがえのない、さわやかな一幅の名画のように感じられた」。ある白人の青年は、人種問題について、ともに活動する中で「広宣流布をしていく同志なんだと感じられるように」なったという。伸一は、大聖人の仏法が「人間と人間の心を結ぶ、人類統合の原理」であると話した。ある黒人の青年は、かつて白人が嫌いであったが、学会の世界の中で「肌の色の違いという差異

に、自分がとらわれていたことに」気づいたという。伸一は、「地涌の菩薩」こそ我々の究極のルーツであると話した。座談会の帰途、伸一の心は弾んでいた。「アメリカ社会に走った人種問題の亀裂を修復し、人間の心と心を結び合う確かな証を座談会で目にしたことが、嬉しくてならなかったからである」(①：179-86)。

1965年8月、アメリカのロサンゼルスでは黒人に対する差別への怒りが爆発し、大きな暴動が起こっている。その中で山本伸一一行は、ロサンゼルスを訪問した。伸一は言った。こうした暴動の原因は不当な人種差別にある。差別は人間の心の中にある。「法の改革から心の改革へ——アメリカ社会を、真実の自由と民主の国にしていくためには、そこに向かって、進んでいかざるをえない」。「戦後、日本は、アメリカによって、信教の自由が保障され、広宣流布の朝が訪れた。だから、私は、そのアメリカに恩返しをしたいんだ」。アメリカでは1863年にリンカーンによる奴隷解放宣言があった。その3年後の1866年には、最初の公民権法が連邦議会で成立している。それ以来、法律面では差別の撤廃に向かっていった。しかし、「人間の心に宿る偏見は、まさに、ウイルスが濾過紙を通して侵入してくるように、法の網の目を潜り抜けて、冷酷な人種差別を生み出していたのである」。伸一は「今こそ、仏法という生命の平等の哲学を、アメリカの天地に流布せねばならない」と決意していた(⑩：96-104)。

人種暴動のさなか、ロサンゼルス郊外にある海外初の寺院起工式が挙行されている。その折、山本会長の指導を整理役員の青年が聴いていた。アフリカ系アメリカ人のロバート・マイケルである。彼は少年時代から、黒人として不当に差別され続けてきた。1958年に彼は仏法に巡りあった。学会の世界に人種差別は一切なかった。マイケルは学会活動を始めてから、白人に対する考え方が変わってきた。アフリカ系アメリカ人を蔑視する人たちに、憎しみよりも哀れさを感じるようになっていったのである。起工式のあとで、第1回野外文化祭が開催された。海外初の文化祭である。メンバーは黒人も白人も一緒になって文化祭の成功を祈り、さまざまな人種の青年がスクラムを組んで芸術的な演技を展開した。1963年、キング博士はワシントン大行進の折、「私には夢がある」と訴えている。ロバート・マイケルは思った。「学会は、私たちは、キング牧師が語った『夢』を、着実に、現実のものにしているのだ。なんと、すばらしいことだろうか。私たちの手で、きっと、このアメリカ社会を変えてみせる！」(⑩：111-27)。

1975年7月、第12回全米総会を中心とした「ブルー・ハワイ・コンベンション」がホノルルで開催されている。3日間にわたるコンベンションは、「ゴールデン・ハワイアン・ナイトショー」から始まった。ここで大きな喝采を浴びたのは、アフリカ系アメリカ人のハリー・ハンクスであった。彼はアメリカを代表するジャズピアニストである。彼は1972年に信心を始めた。当時の彼は自分の音楽に行き詰まりを感じていたが、唱題で新たな境地を開いた。1974年、山本伸一はハンクスをこう

励ましている。「あなたはジャズ界の王者になる人です」。このナイトショーでの彼の演奏には、生命の躍動がみなぎっていた。1983年、ハンクスはアメリカ音楽界で最高の栄誉である「グラミー賞」を受賞した。それ以来、この賞を10回以上受賞している。彼は「ジャズ界の王者」となったのである (22: 144-58)。

1993年1月、山本伸一はアメリカを訪問している。その折、創価大学ロサンゼルス分校において“人権の母”ローザ・パークスと会談した。彼女は『写真は語る』という本のことを話した。著名人が人生に最も影響した写真を1枚選んで掲載する企画であり、自分がその一人に選ばれていた。パークスは、伸一との写真を載せたいという。出版された写真集には、伸一と握手する写真が掲載された。そして、この出会いは「世界平和のための新たな一歩なのです」と書かれていた (30下: 350-1)。

7. 世界市民の行進

山本伸一はアメリカで各種の文化交流を推進しつつ世界市民を育成していく。1967年7月、第6回全米総会がロサンゼルスで開催されている。これにはアメリカ50州、カナダ、メキシコの代表1万人が集った。伸一はこの総会に、日本の富士鼓笛隊を派遣した。「音楽と友情の、日米の平和の懸け橋を築きたいとの思いからであった」。総会に引き続き、「日米友好の夕べ」が行われている。ここでアメリカ鼓笛隊と富士鼓笛隊は、「星条旗よ永遠なれ」を合同で演奏した。翌日、全米総会を記念する“日米鼓笛隊パレード”が晴れやかに行われている。このパレードには富士鼓笛隊やアメリカ鼓笛隊・音楽隊など、合計2000人が出場した。アメリカの中心会館があるサンタモニカ市のオーシャン大通りを、軽快な調べを奏でながら華麗に行進した。沿道に集った5万人の観衆は、「平和の行進」に拍手と喝采を送った。伸一は「自分がつくった鼓笛隊が、日米の友好の懸け橋として、見事に平和の調べを響かせてくれたことが嬉しくてならず、無量の感慨を覚えるのであった」 (14: 120-41)。

1974年4月、山本伸一はカリフォルニア大学ロサンゼルス校で「21世紀への提言」と題し記念講演を行っている。これが世界の大学での初の正式な講演であった。伸一は講演の開始を待つ間、戸田城聖の言葉を思い起こした。「ぼくは、日本の広宣流布の盤石な礎をつくる。君は、世界の広宣流布の道を開くんだ。構想だけは、ぼくがつくっておこう。君が、それをすべて実現してくれ給え」。「世界に、妙法の灯をともしていくんだ。この私に代わって」。伸一は心で戸田に語りかけた。「これから先生に代わって、先生にお教えいただいた仏法の生命論の一端を語ってまいります。世界に向かって、創価思想の叫びを放ちます。弟子の戦いをご覧ください」。伸一は講演の中で訴えた。「21世紀は、人間が生命に眼を向ける『生命の世紀』としなければなりません。新世紀が、夢に見た人間謳歌の文明になるかどうか

は、常住不変、不動の力強い不変の生命を発見しうるかどうかにかかっているのです」。この講演では仏法という生命の視座から現代文明の本質を浮き彫りにし、人間のための文明を創造する根本哲理を明らかにした。聴衆は総立ちとなり、雷鳴のような拍手が鳴り響いた (⑩：211-22)。

戸田城聖が山本伸一によく語っていたことがある。「仏法の生命尊厳の法理と慈悲の精神が、創価の思想が、人類救済の大哲理であることを、世界に知らしめていかなければならない。それには、大学が大事だ。世界の大学が仏法哲理の重要性を知り、研究に取り組むようになれば、そこから新しい思想潮流が起こる」(⑩：222)。1996年6月に伸一は、ニューヨークのコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジで「世界市民」教育をテーマに講演している。「世界市民とは、生命の平等を知る『智慧の人』、差異を尊重できる『勇気の人』、人びとと同苦できる『慈悲の人』と考えられ、仏法で説かれる『菩薩』が、その一つのモデルを提示している」と語った (⑩下：407-8)。

山本伸一が創立した創価高校1期生の矢吹好成は、創価大学経済学部にて1期生として進学している。そして、1975年にアメリカのミネソタ州グスタフ・アドルフ大学に留学した。冬は寒く、焦りや孤独感に襲われていた頃、伸一からの手紙が届く。「君よ、わが弟子なれば、今日も、30年先のために、断じて戦い進め。君の後にも、多くのわが弟子たちの、陸続と進みゆくことを、忘れないでいてくれ給え。君には、多大なる責任と使命があるのだ」。伸一は矢吹を励まし続けた。「将来は、アメリカに創価大学をつくるから、その時のために、しっかり勉強して、博士号を取るんだよ」。矢吹はワシントン州立大学で博士号を取得している。1987年には創価大学のロサンゼルス・キャンパスが開校し、やがてアメリカ創価大学に発展した。2001年にはオレンジ郡キャンパスが開学し、アメリカ創価大学が本格的に始動する。矢吹好成学長を中心に、「人類の平和を創造する世界市民の育成に船出したのである」(⑫：391-6；⑮：295-7)。

1975年7月、ホノルルでは第12回全米総会を中心とする「ブルー・ハワイ・コンベンション」が開催されている。アメリカのフォード大統領からも祝福のメッセージが寄せられた。このコンベンションには、広島からの交流団も参加している。広島のメンバーは太平洋国立記念墓地を訪れてこう話した。「被爆地である広島の私たちが戦う相手は、アメリカとか、アメリカ人じゃない。人間に巣食う魔性の生命じゃ。ほいで、その魔性を打ち破り、人間の心に、平和の砦をつくることができるのが仏法じゃ。じゃけん、私らの使命は大きい」。3日間にわたるコンベンションは、「ゴールデン・ハワイアン・ナイトショー」から始まった。ここでコンベンションのテーマソングである「遙か200年の未来に」が発表された。コンベンションはアメリカ200年前年祭記念行事である。この歌には建国の理想を200年後の未来に継承していく誓いが託されている。コンベンションの2日目には、第12回全米総会

が開かれている。アメリカのメンバー2万人をはじめ、見守る市民を含めてワイキキの浜辺には3万以上の人びとが集った。ホノルル市長代行、ハワイ州知事があいさつしたあと、伸一が登壇した。彼は「技術文明の大国として世界平和の指導的役割を担ってこられた貴国が、これよりは再び、自由と平和のために、精神文化の大国として、より偉大な貢献をされんことを」期待すると語った。総会のあと、「インターナショナル・ショーと水の祭典」が開催された。この祭典のテーマ曲が「世界は一つ」である。戸田城聖は「地球民族主義」を提唱した。この思想がアメリカの青年たちによって歌われたのである。コンベンションの3日目には、「スピリット・オブ・1776ショー」が開催された。アメリカ建国の精神と歴史をうたい上げたミュージカルである。舞台は「ハワイアン・ファンタジー・ショー」に移り、5万人の観衆を魅了していった。最後は「フォーエバー・センセイ」の大合唱となった。ワイキキの浜辺に歓喜の涙が光った (22: 93-193)。

むすび

本稿では池田大作のアメリカ観を全体的に考察してきた。小説『新・人間革命』は池田のアメリカ観を研究するにあたり、参照すべき一次資料と言える。同書の量的分析によれば、同書はアメリカに大きく注目し、この国の創価学会を中心に引き上げ、この国を肯定的に描いている。同書の質的分析によれば、アメリカ創価学会は山本伸一の指導のもと大きく発展している。東西冷戦とアメリカ同時多発テロ事件に揺れ動くアメリカに、伸一は平和への道を示し続けている。伸一はアメリカを代表する政治家たちと対話を積み重ねている。伸一はアメリカにおける人種差別を解決するという夢の実現に力を尽くしている。そして、伸一はアメリカで各種の文化交流を推進しつつ世界市民を育成しているのである。

以上の考察から、池田大作のアメリカ観を「仏教的アメリカ観」と呼ぶことができる。池田のアメリカ観には次の特徴がある。第1に、人間主義者としてアメリカに生きる一人ひとりに焦点を当てている⁷⁾。山本伸一はこの国を27回訪れ、仏教を基調とする人間主義者として政治家や文化人と対話し、庶民と語り合っている。そして、人間革命を目指す創価学会員一人ひとりを指導し激励している。アメリカの未来を決めるものは人間であり、伸一はその人間と心を通わせ続けているのである。第2に、世界市民としてアメリカを我が事ととらえている。日本人は歴史的経緯から親米と反米の間を揺れ動いてきた。しかし、『新・人間革命』はアメリカの肯定的側面だけでなく、否定的側面も描いている。伸一はアメリカのすべてを受け止めつつ、この国の平和と幸福ために行動し続けている。そして、アメリカ創価学会は世界市民輩出の母体となった。伸一はコロンビア大学の講演で世界市民のあり方を示し、自ら創立したアメリカ創価大学では世界市民が育成されているのであ

る。第3に、仏教者としてアメリカを「世界広布の開拓者」と見ている。『新・人間革命』は1960年の第1回アメリカ訪問で始まり、2001年のアメリカ同時多発テロ事件と「創価学会創立記念日」を祝賀する本部幹部会で終わっている。世界広布の歴史はアメリカから始まる。同書にはアメリカ広布を推進する数多の学会員たちの姿が描かれている。彼らにはアメリカが世界広布の先駆であるとの誇りがあり、この国には世界広布のモデルが形成されていく。アメリカが世界広布を開拓する国としての役割を演じているのである⁸⁾。

池田大作が愛するアメリカは、『新・人間革命』を手にする人の心に生き続けていく。

注

- 1) 池田大作のアメリカでの記念講演、識者との対談集などの検討は今後の課題となる。
- 2) 文献を示す割注において、『新・人間革命』は巻数とページを記すことにする。例えば、「①：2」は「同書、第1巻、2ページ」のことである。
- 3) 『新・人間革命』から直接引用する場合、本文中の改行によって生じたスペースを省略している。
- 4) 「方向」とは著者から見てアメリカの描写が肯定的側面を中心にするか、中立的であるか、否定的側面を中心にするかということである。
- 5) 池田大作は「山本伸一」という仮名で登場する。
- 6) 池田大作はこの事件に対し、「人間主義」平和構想を提唱している（宮川 2007）。
- 7) 池田大作の人間主義は「仏教的人間主義」と呼ぶことができる（宮川 2017）。池田のソ連・ロシア観と中国観も、この人間主義を基調としている（宮川 2009、2020）。
- 8) 入江昭は日米相互イメージにおける5つの型を提示している。「世界政策主義」は、世界政治の観点からのイメージであり、道徳や感傷性を欠くものである。「国際主義」は、外国人を世界戦略の対象としてではなく、文化交流の相手として認識する。「国家主義」は、国防面、政治面、経済面などにおいて国益を保護することに関心をもつ。「特殊主義」は、個人レベルで外国を自己の利益・経験・偏見を通して見る場合である。「排他主義」は、自国の外部にあるものに対する軽蔑・無知・無関心を表している（入江 1991：1-29）。池田大作のアメリカ観は「国際主義」に近いが、日米相互イメージの新しい型を提示している。

参考文献

- 秋庭裕 (2017) 『アメリカ創価学会〈SGI-USA〉の55年』新曜社。
- 池田大作 (1998-2018) 『新・人間革命』全30巻、聖教新聞社。
- 池田大作 (2003-2020) 『新・人間革命 聖教ワイド文庫』全30巻、聖教新聞社。
- 池田博正 (2018) 「小説『新・人間革命』研さんに当たって」『聖教新聞』2018.10.3：3。

- 入江昭（1991）「序」加藤秀俊・亀井俊介編『日本とアメリカ——相手国のイメージ研究』日本学術振興会、1-29。
- インダンガシ、ヘンリー（2018）「私の読後感 識者が語る ケニア作家協会ヘンリー・インダンガシ会長」『聖教新聞』2018. 11. 21：3。
- 「栄光の共戦譜」編纂委員会（2020）『池田先生 会長就任60周年記念 栄光の共戦譜』創価学会。
- 亀井俊介（1986）『アメリカの心 日本の心』講談社。
- 川端亮・稲葉圭信（2018）『アメリカ創価学会における異体同心——二段階の現地化』新曜社。
- 佐藤優（2020）『池田大作研究——世界宗教への道を追う』朝日新聞出版。
- 澤田次郎（1999）『近代日本人のアメリカ観——日露戦争以後を中心に』慶応義塾大学出版会。
- 聖教新聞社（2021）「人間革命検索サービス」、https://www.seikyoonline.com/search_novel/、2021年3月16日閲覧。
- 聖教新聞社報道局（2019-2020）『世界広布の大道——小説「新・人間革命」に学ぶ』Ⅰ-Ⅳ、聖教新聞社。
- 創価学会（2021a）「池田大作先生の足跡」、<https://www.sokanet.jp/daisakuikedai/index.html>、2021年3月16日閲覧。
- （2021b）「小説『新・人間革命』に学ぶ」、https://www.sokanet.jp/recommend/human_revolution/、2021年3月16日閲覧。
- 年譜・池田大作 Ⅲ編纂委員会（1995）『年譜・池田大作 Ⅲ』第三文明社。
- 長谷川雄一（2004）「日米関係における『ペリー』の記憶」長谷川雄一編『日本外交のアイデンティティ』南窓社、9-37。
- 長谷川雄一（2019）「日米関係の思想史——『対立・自立』と『協調・従属』のアボリア」長谷川雄一・金子芳樹編『現代の国際政治 [第4版] ——変容するグローバル化と新たなパワーの台頭』ミネルヴァ書房、328-52。
- Hammond, Phillip and David Machacek (1999) *Soka Gakkai in America: Accomodation and Conversion*, Oxford University Press. (=2000、栗原淑江訳『アメリカの創価学会——適応と転換をめぐる社会学的考察』紀伊國屋書店。)
- パンブキン編集部（2014-2020）『データで学ぶ「新・人間革命」』Vol.1-5、潮出版社。
- 宮川真一（2007）「池田大作先生の『9・11』認識と『人間主義』平和構想」創価大学通信教育部学会編『創立者池田大作先生のご思想と哲学 第1巻』、第三文明社、167-93。
- （2009）「ロシア『全人性』の母なる大地——池田大作先生のソ連・ロシア観」『通信教育部論集』12：69-87。
- （2017）「現代世界における文明論的パラダイム・シフト——『仏教の人間主義』の可能性」『通信教育部論集』20：69-84。

—— (2020)「池田大作の『人間主義』的中国観——小説『新・人間革命』が描く『金の橋』」『通信教育部論集』23:121-36。

ラダクリシュナン、N. (2018)「インド ガンジー研究評議会議長 N・ラダクリシュナン博士 (インタビュー)」『聖教新聞』2018. 9. 11: 2。